OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「桐壺」～「夕顔」諸本の検討 : データベース活用の初歩的試み
Author(s)	大谷, 晋也
Citation	詞林. 1988, 4, p. 16-24
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67259
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「桐壺」～「夕顔」諸本の検討

―データベース活用の初歩的試み―

大谷　亜目也

はじめに

筆者は現在、『源氏物語別本集成』（昭和六三年十月第一巻刊行、以下『集成』と略記）の編集作業に携わっている。書名からわかるとおり、源氏物語の諸本のうち、「別本」と称される写本群の異同を、容易に一覧できる形で提供するのがそのねらいである（1）。作成にあたっては、パーソナルコンピュータによるデータベースを利用するという、従来とはまったく違った手法を用いた。すなわち、底本を文節に切った形でデータベースとして蓄え、翻刻した本文もそれと対校する形でコンピュータに入力するのである。そのデータを特殊なプログラムで処理すれば、そのまま本の形で出版できるように配慮されている。

出版される『集成』自体もさることながら、その母胎となったデータベース自体を利用することによって、別本の文献学的研究、ひいては源氏物語の「読み」に新たな光を投げかけることができるようになるだろう。その露払いの意味あいから、とり急ぎ、データベースを用いた初歩的な調査の一例を示すのが本稿の目的である。

『集成』の基盤となったデータベースは、底本の文節に他の本文を対応させて諸本の異同が一覧できるようにした表のような形で記録されている。表の項目数は、縦が底本の文節数、横が採用した伝本の数となる。第一巻を例にとると、「桐壺」で三〇一八文節・七本（底本含む。以下同じ。）、「帚木」五四三五文節・六本、「空蟬」一二七八文節・五本、「夕顔」五五三六文節・五本である。底本と諸本の文節数はもちろん一致しないが、基準とした底本の文節を動かさずに対校することを原則としている（2）。

表Ⅰ「空蟬」の異同状況

	陽明	明融	麦生	阿里
明融	5 0			
麦生	5 4	4 5		
阿里	5 5	4 3	1 7	
尾州	3 4	4 6	5 0	5 0

表Ⅱ「夕顔」の異同状況

	陽明	明融	麦生	阿里
明融	5 5			
麦生	5 1	5 2		
阿里	5 3	5 2	1 2	
尾州	4 7	5 5	4 8	4 9

表Ⅰ・Ⅱは、このデータをもとにして、「空蟬」と「夕顔」の異同状況をパーセンテージで表わしたものである（小数第一位四捨五入）。分母は全データ数、分子は相違の見られたデータ数であるから、数字が大きいほど異同が激しいことになる。ここでいう「相違」とは、大は何十字に及ぶ独自異文から小は仮名遣いの違いや虫損による一字の判読不能までのすべてを含んでいる。逆にいえば、ここに「相違」として挙げられなかったデータは、漢字仮名まじり文のレベルにおいて互いにまったく同一であることを意味する（3）。

諸本間の違いはおおむね五割を中心としたところに集まっており、この表だけから諸本の位相を考えることはむずかしい。空蟬巻の陽明文庫本と尾州河内がやや近いように見える程度である。異同の中味を検討しなければ、なんともいえない。

そんな中できわだって目をひくのが、麦生本と阿里莫本間の相違の少なさである。この数字がどれだけの近さを意味するかは、次の事実からも推察することができる。すなわち、伝藤原定家筆「花散里」（尊経閣文庫蔵）と飛鳥井雅康筆「花散里」（いわゆる大島本、古代学協会蔵）とをまったく同様の条件のもとに比較した結果、一八%という数字がえられたということである。『源氏物語大成』（以下『大成』と略記）で池田亀鑑博士が「阿里莫神社旧蔵源氏物語」を「麦生本と同系統の別本」としておられることに、こういう単純な比較の結果えられた数値からでさえ、客観的な根拠を与えることができる。

ただし、阿里莫本と麦生本に「多少の異同があるのは、湖月抄などによる後人書入れの本文が混入した結果であらう」と述べておられる点については、疑問が残る。「空蟬」における両

者の違いは表記にかかるものが過半数を占め、その他の相違にも「異文」といえるほどのものはほとんどない。おおむね、書写の過程で自然発生的に生じたと思えるような一字か二字の異同の集積といってよい。これは、「夕顔」に関しても同様だ。その異同の中味に関してここで詳しく触れる余裕はないが、さらに詳しく検討する必要があろう。

二　「帚木」における阿里莫本

表Ⅲは「帚木」における異同状況を示したものである（4）。表の性格は表Ⅱと同じである。これを見て、尾州河内と明融本、尾州河内と阿里莫本の異同が比較的小さいことに気がつく（他にも三〇台のパーセンテージを示した数字があるが、ここでは触れない）。

阿里莫本「帚木」は『大成』に採用されていない。岡嶌偉久子氏はそれを「池田氏が全帖にわたり精査を行なった」うえで「ある基準をもって取捨選択を行」ったためであろうと指摘され、独自の調査をなさった結果、阿里莫本「帚木」を河内本系統と判断なさっている（5）。

阿里莫本には尾州河内を含めた他本に見えない独自の語句が散見されるものの、この判断にはほぼ納得できる。とすれば、尾州河内を基準とした場合、阿里莫本より相違の少ない明融本も、「河内本系統」ということになるのであろうか？

データベースを利用して尾州河内と阿里莫本の異同の中味を検討すると、そのほとんどが漢字仮名の区別や仮名遣いの違いであることが容易にわかる。とくに、阿里莫本には漢字が比較的多く使用されているため、尾州河内の仮名表記との相違が数字になって表れている面が強い。表記上の相違を別に考えれば、阿里莫本は河内本系統と断じてほぼ間違いはないであろう。ときおり、前述の独自語句が目につくのは気になるところではあるが、古伝本からのものであるとする根拠もない。

これに対して、数字の上からは尾州河内との異同が少ないように見える明融本には、河内本に見える独自異文が見られない。

表Ⅲ「帚木」の異同状況

	陽明	明融	御物	国冬	阿里
明融	37				
御物	42	35			
国冬	45	46	48		
阿里	45	41	44	48	
尾州	40	31	37	41	35

ところが、阿里莫本の該当箇所にはそれが見られるのである。例を挙げよう。基準として尾州河内を据え、相違のあるところだけをその左右に示した。「・」は字数調節の目的で添えたもので、「×」は該当文字がないことを示している。

(明融本)　　心・・　　こと　　ゝ
(尾州河内) 我・こゝろえたる事・はかりをゝのかしゝ心をや
(阿里莫本) わか心・・

　　××××××・・××××××　　×××
りてわれかしこ・・にうち思て人をはおとしめさまになとかた
　　かほ
　　こと　　×
はらいたき事・おほかめり　(02 03 13～02 03 24)　(6)
　　×
(明融本)　　せ
(尾州河内) ひたりのむまのかみ藤しきふのそう御物いみにこ
(阿里莫本) 左馬頭・・・・・・藤式部丞・・・

　　む　　り・××××××××・××××××××××
もらんとてまいれる・やかてこの御方・のとのゐにとてまいれ
　　か　　此・かた　殿・　×

×
り　(02 04 90～02 04 94)

(明融本)　　よを××××××　　××××××
(尾州河内) かたけなる世なれはましてときみはこゝろのうち
(阿里莫本)　　よ　　い　君・心・・

×　　へし
にお・ほす・・　(02 07 33～02 07 36)
　　も

ここにみられる尾州河内と阿里莫本の違いは、そのほとんどが表記に関するものであり、意味の差を生むような異同がわずかに見られるにすぎない。一方、尾州河内と阿里莫の両方に見られる、かなりまとまった表現が、明融本には存在しないことがわかる。これが明融本の単なる書き落としではなく、青表紙系本文に共通するものだということは、明融本の本文の辻褄があっていることや、大島本にもこれらの語句がないことからも推定できよう。

かなりの長さに及ぶ異文も、仮名遣い一つの相違も、それが一つの項目内におさまっている限り、今回のような比較の下では同様に「1」である。異文がたくさんあるとはいっても、表

記上の些細な違いの多さとくらべれば、その数は非常に小さいものとなる。いま仮に「独自の異文をたくさん含むが、表記上似かよったもの」と「独自の異文はほとんどないが、表記上大きく異なるもの」とがあるとすれば、表の数字は後者の方が明らかに大きくなる。物語を鑑賞する上での実質的な相違はどちらの方が大きいかはいうまでもあるまい。

機械的かつ単純な比較の結果表れた数値の取り扱いには慎重になるべきである。そんなことは当然のこととして認識しているつもりでも、眼前に意味ありげな数値が厳としてならぶと、ついそれにひっぱられてしまう。今回は「明融本が河内本系統」という常識的に矛盾する結果だからその数字の「嘘」に気づいたが、自分の頭の中の常識と眼前の数値が一致した時には、間違った即断を下さないとも限らない。コンピュータを使って数値をだすような方法をとるときは、通常以上にこういった点に神経質になるべきであろう。

三　阿里莫本「桐壺」の性格

表Ⅳは「桐壺」における異同状況である（7）。「空蟬」や「夕顔」と比較して阿里莫本と麦生本との間の相違が激しいことがわかる。三十数％と十数％とでは、まったく意味が異なる。前者は中味を検討しないとなんともいえない数字だが、後者は一読したところでは相違に気づかないほどの類似性をもっているといえる数字である。

「花散里」の伝定家筆本と大島本とを読み比べてみて、ほとんど相違などないというのが私の当初の感想であった。その二本を比較した結果の数値が一八％であったのである。

表記の方法に現在ほどの統一すらなかった時代の写本においては、よほど慎重な臨摸本でないかぎり、漢字と仮名の区別や仮名遣い・音便などの相違によって、容易にそれぐらいの異同が出来するのである。

実は麦生本「桐壺」

表Ⅳ「桐壺」の異同状況

	陽明	明融	御物	国冬	麦生	阿里
明	53					
御	54	38				
国	51	50	52			
麦	63	44	50	61		
阿	57	32	42	55	34	
尾	48	32	37	47	45	41

は、他の巻にはない特徴をもっている。他本と校合した結果としてのおびただしい書き込みがあるという点である。データベース上では、それらの書き込みに特殊な記号をつけてそれとわかるようにしているため、書き込みのあるデータは、すべて異同有りとして数えられる。その結果が三四%なのである。試みに、データから校合による書き込みをすべて取り除き、麦生本の本行の本文と阿里莫本とを比較してみると二七%という数字がえられた。やはり、両者はかなり近い本文をもっているといって差し支えないであろう。それでもまだ「空蟬」や「夕顔」における両者の比較とは有意な差があるように思える。

阿里莫本「桐壺」については、岡嶌氏が「別本としてよいのではないかと思う。少なくとも麦生本を別本とするなら阿里莫本もそうであろう」と述べておられるが、その性格には言及されていない（8）。また、伊藤鉄也氏は「いわゆる青表紙本・河内本・別本それぞれとの関係を複雑に内包させたものである」と発言なさっている（9）。ここでは、その阿里莫本「桐壺」の性格について考えてみたい。

麦生本のデータから書き込みを取り除く作業のときに、見せ消ちやなぞりがきを採ることによって阿里莫本から離れるものと、逆に近接するものがあることに気づいた。麦生本「桐壺」の書き入れは、青表紙本本文との校合の結果記されたもので、書き入れの見せ消ちを採ると青表紙系の本文になるという性格をもっているものだ（10）。

したがって、麦生本の見せ消ちやなぞりがきを採ることによって、本文が阿里莫本に近づくことがあるということは、阿里莫本が青表紙本的性格を有しているためであると考えられる。明融本と阿里莫本との比較の結果えられた三二%という比較的低い数字も、そのことを示唆しているようだ。

そこで、明融本と阿里莫本、麦生本と阿里莫本を表記の違いを無視して比較した結果、前者では七・五%、後者では一六・三%のデータに異同が見られた（11）。意味上の違いを指す数値であるから、かなりの重みをもっている。これから判断すると、阿里莫本は、『集成』に採られた本文の中で、明融本に最も近いことになる。しかし、阿里莫本を青表紙系と断ずることにはためらいをおぼえる。明融本にない語句が相当数散見されるからである。たとえば次のごとき。

（明融本）　こと　××　×××××
（阿里莫）　いとはしたなき事・おほかりけれと人の御おほえか
（麦生本）

×

たしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給ふ

×

（01 00 92〜01 01 02）

（明融本）　　××××××
（阿里莫）　とくまいり給へなとはか〳〵しうもおほさるゝ事も
（麦生本）　　×
　　たま
の給・はせやらす　（01 10 16〜01 10 22）（12）

この二例に見られる「人の御おほえ」「おほさるゝ事も」は、『集成』に採られた本文のなかで、阿里莫本と麦生本にだけ見られる異文である。明融本と阿里莫本で異同のあるところは、阿里莫本と麦生本が一致していることが多い。また、尾州河内とも比較的近いようである。明融本と阿里莫本とで異同が生じた二二七箇所のうち、阿里莫本が、麦生・尾州河内双方の本文と一致するものが八七、麦生本とだけ一致するものが五四、尾州河内とだけ一致するものが十あった。

以上から、阿里莫本「桐壺」は、基本的には、青表紙的性格の強い本文の中に、麦生本系の本文が入った混成本文だといってよいのではなかろうか。河内本との関係については、麦生本「桐壺」自体が河内本と密接な関係にあることを考え合わせると、十分納得がいく（13）。問題は、麦生本と阿里莫本に共通に見られる独自異文や、数は少ないが阿里莫本だけに見られる独自語句が、何に由来するものかということである。青表紙本でも河内本でもないとすれば、古伝本からのものであると考えざるをえない。

阿里莫本は、青表紙系の本文を基調としながら、麦生本にも近く、共通する独自異文をも有していた。『大成』研究資料篇から池田亀鑑博士の別本の分類表の第二類を引用し、阿部秋生氏の別本陽明文庫本「桐壺」に関する考察を簡単に追いかけるかたちで、阿里莫本「桐壺」がどれにあたるか考えてみることにする（14）。

二、河内本成立以後の混成本文を有する伝本である場合

イ、青表紙本と河内本との混成
ロ、青表紙本と古伝本との混成
ハ、河内本と古伝本との混成

もし、イであるとするならば、明融本と異同がある箇所の本文は、河内本と一致するはずである。しかるに、そうなるものは、半分以下の四三％にすぎない。過半数を占める異同の説明がつかないのである。青表紙的性格の強さからハも当然除外される。さらに、ロと断定するには河内本に近すぎる。とすると、イ・ロ・ハのどれにも該当しないことになるから、阿部秋生氏が陽明文庫本に関して述べられた「池田博士のいう古伝本、第一類古伝本系別本である可能性が非常に大きい」というご発言

を、阿里莫本にもあてはめてよいのであろうか。

鎌倉時代中期に書写されたと考えられている陽明文庫本「桐壺」と、はるか後世の江戸時代に写された阿里莫本「桐壺」を同列に論ずるわけにはいかない。阿里莫本が第一類古伝本系別本である可能性はきわめて小さいだろう。実際の写本のありようは、イ・ロ・ハの三種に分類できるような単純なものではない。麦生本と共通する独自異文と、阿里莫だけがもつ独自異文との両方を説明する解釈を求めるなら、「ロを基調とした、ハとの混成本文」あたりに落ち着くようである。やはり伊藤氏のご指摘のとおり、「いわゆる青表紙本・河内本・別本それぞれとの関係を複雑に内包させたものである」といわざるをえない。

おわりに

本稿の目的は「データベース」「を利用」した研究の「露払いの意味あいから、とり急ぎ、データベースを用いた初歩的な調査の一例を示す」ことにあった。もとより研究でも論考でもないが、その目的すら達しえたかといささか心もとなく思っている。

また逆に、「三　阿里莫本『桐壺』の性格」においては、浅学非才をもかえりみず、目的を逸脱して一人よがりの検討を記したことに対する不安も強い。

しかし、手作業で行なっていたとしたら途中で挫折していたであろう『源氏物語別本集成』が刊行され、その母胎となったデータベースを利用することができるようになれば、これまで時間的制約からあきらめざるをえなかったような研究の可能性も生じてくる。コンピュータに明融本と阿里莫本の一巻分の相違を一覧表示させるのには、一分を要しないのである。本稿で述べたことを調べるぐらいなら、数時間もかからない。同じことを手作業でやったなら、おそらく気の遠くなるような時間が必要となったであろう。

もし、「たかが道具」の「深遠なる学問」に対する貢献の予感を少しでも感じさせることができたなら、本稿の「目的」は達したといえるのだが。

(注)

(1) 一巻の場合、底本を陽明文庫本とし、比較の意味から、青表紙本として伝明融筆本、河内本として尾州家河内本も採用している。それ以外の本文は次のとおり。以下に出てくる略称は、これらの本を指す。

御物本（東山御文庫蔵）
伝津守国冬筆本（天理図書館蔵）
麦生鑑綱筆本（天理図書館蔵）

阿里莫神社旧蔵本（天理図書館蔵）

（2）詳細は『集成』の凡例を参照。

（3）仮名の字母の違いは相違とみなしていない。

（4）国冬本の最後には全体の六％程度に及ぶ大きな落丁がある。ここでは、その部分を比較の対象から省いた。落丁の性質については、『集成』の凡例を参照。

（5）「源氏物語阿里莫本　――『源氏物語大成』不採用二十六帖について――」（『ビブリア』第九十号。昭六三・五）

（6）この番号は『集成』で使用されている番号で、上の二桁が巻（ここでは「帚木」）を、後の四桁が底本の文節番号を示している。以下同様。

（7）尾州家河内本「桐壺」は、01 04 60～01 05 69および01 10 26～01 11 28にわたって落丁があるが、翻刻本や影印本に倣って、該当箇所は高松宮本を採用した。

（8）注（5）の岡嶌論文参照。

（9）「源氏物語『桐壺』の別本諸本の位相　――パーソナル・データ・ベースを活用した研究の実践例として――」（『大正叢記』創刊号。昭六一・三）

（10）注（9）の伊藤論文参照。筆者もデータベース上でこの事実を確認した。

（11）ここでいう表記の違いとは、漢字と仮名の区別、仮名遣いの区別などを指す。目安として、同じ読みになるものは同一と考えた。例外として、「おほす・おもほす」「おほゆ・おもほゆ」相互の区別もこれに含めた。以後、「相違」「異同」等という語は、表記上の違いを除いたものの意味で使っている。また、麦生本は本行の本文を用いて検討している。

（12）阿里莫は「給へるなと」とあって「る」が見せ消ちとなっているが、ここでは省略した。

（13）注（9）の伊藤論文参照。また、吉岡曠氏は「河内本『桐壺』巻の校訂課程（上）・（下）」（『文学』昭五九・一～二）のなかで、麦生本「桐壺」を河内本の底本的本文ではないかと述べておられる。

（14）阿部秋生「別本の本文」（『源氏物語の本文』一五二～一五七頁。昭六一・六）

（私立金蘭千里高等・中学校教諭）